県立盲学校生活情報科

『暮らす力』支える

中途視覚障害対象に今春新設

病気や事故で突然目が見えなくなったり、視力が衰えたりする中途視覚障害の人たちに暮らし方をアドバイスしようと、今春、県立盲学校（秋田市、中村信弘校長）に「生活情報科」が新設された。家事のこつから安全な歩き方まで授業の内容は幅広く、現在、50～60代の3人が通学している。今まで見えていたものが見えなくなるという不安や不便と向き合いながら、3人はさまざまな角度から「暮らす力」を学んでいる。

実際に街へ出て、白杖を使った歩行訓練をする生活情報科の星さん＝秋田市のJR秋田駅前

「盲学校でしか習えないことがある。例えば白杖。使い方を知らなければただの棒だけれど、覚えれば命のつえになる」。県南から通学している由美子さん(63)＝仮名＝が言う。中途視覚障害の人が白杖の使い方を学べる施設が県内にはなかった。しかし生活情報科では、白杖の使い方から安全な歩き方まで教員が手ほどきしてくれる。「とても助かっている」と由美子さん。

5年ほど前、運転中に対向車の光が目に入った途端、前が見えなくなった。視野が狭まっている、と眼科医に告げられた。今は左目でわずかに物を見ることができるが、右目は見えない。「豆腐をどこまで切ったのか分からない。小銭や錠剤を足元に落とすと自力では捜せない。日常のいろんなことに不便を感じた」

そんな中、盲学校が中途視覚障害の人のために学科を新設したと主治医が教えてくれた。「これからは少しでも生活に必要なことを学んだ方がいい」と医師は勧めた。外出しても危険を感じて歩くのがやっとだったけれど、由美子さんは「生活の質を上げたい」と願い、入学した。今は週5日、電車通学している。

家事のこつ、歩き方指導

生活情報科の授業は、「生活の場に戻ったときすぐに生かせるもの」を意識して組まれている。路線バスの乗り方、街中での歩行訓練、音声パソコンの使い方、洗濯や調理のこつ…。「さまざまな用具も紹介するけれど、生活の中で感じる不便を何らかの工夫で解決できるように支援していきたい」と担任の落合久貴子教諭は話す。

県内には障害者手帳（1、2級）を持つ中途視覚障害の人が少なくとも2千人いるとされる。しかし「自立」への後押しは十分ではない。「生活する上でのスキルを学びたくても、訓練できる施設は県外にしかなく数も限られている。中には外出に不便を感じ、閉じこもりがちになる人もいる」（中村校長）。新学科には、盲学校が持つ人材や情報を生かし、そうした人たちを支援する狙いがある。

3人にとっては、ここで学ぶこと自体が大きな一歩だった。孝之さん(64)＝県央部、仮名＝は40代後半で「網膜色素変性症」と診断された。左はほとんど見えず、視力0・3の右目が頼りだ。良くなることはないと医師に告げられ、苦しんだ。外出する気が起きず、家にいることも多くなった。しかし次第に「悩んでいるだけでは駄目だ」と思うようになり、入学を決めた。心配していた家族も今は応援してくれる。

星健次郎さん(57)＝秋田市＝は昨年から視力が低下し、右目は0・02、左目はほとんど見えない。先々に不安を感じていた時、学科新設を知ってすぐ応募した。「最後まで、できる限り自分の力でやりたい。『ここまでは自力でできるので、ここからお願いします』という生き方をしたい」。そう思って学んでいる。白杖を手にさっそうと街を歩くことが、今の目標だ。

（三浦美和子）

Q 生活情報科

歩行や点字、パソコン、家事など日常生活を中心としたカリキュラム。両眼の視力がおおむね0・3未満、将来視力が著しく低下する恐れがある―などが入学の条件。定員5人。授業は週5日（1日6コマ）で期間は原則1年。このほか希望の授業のみを定期的に受けることも可能。授業料は無料。